

食 人 鬼

鬼
昔、禪僧の夢窓國師、美濃の國を獨りで旅行してゐた時、路を教へてくれる人もない或山中で路に迷うた。長い間、たよりなくさまようて、もう、夜の宿を求める事はできないとあきらめかけて居る時、日の最後の光で照らされて居る山の頂きに、淋しい僧のために造つてある例の庵室と云ふ小さい隠者の家が見つえた。その家は荒れはてて居るやうであつたが、國師は熱心にそこへ急いで行つて、老僧が一人住んで居ることを見て、一夜の宿を乞うた。老僧は荒々しく斷つたが、それでも夢窓に隣りの谷で宿と食物の得られる村を教へてくれた。

食
夢窓はその村へ行く道が分つた。それは家が十二三軒までではない農村であつた。そして村の庄屋の家に親切に迎へられた。夢窓の着いた時四五十人の人が重なる座敷に集まつてゐたが、彼は別の小さい部屋へ通されて、そこで直ちに食物や寢床を與へられた。大層疲れてゐたから、早く寢るために横になつた。しかし、眞夜中少し前に、つぎの部屋で大きな聲で泣いて居る音で眠りをさまたされた。やがてふすまは靜かに開いて、提燈を持つた若者が部屋へ入つて、恭しく彼に挨拶をして云つた、

『御出家様、困つた事でございますが申上げねばなりません。私は今この家の責任ある戸主でござ

ございます。昨日私は單に長男でした。しかし、あなたがこちらへ御出でになつた時、御疲れのやうでしたから、御迷惑になるやうな、どんな事があつてもならないと思ひました。それで父がつい二三時間前に死んだ事も話し致しませんでした。つぎの部屋で御覽になつた人々はこの村の人々です、ほとけに最後の挨拶をここにこへ集まつて居ります。そして、今一里程離れた外の村へ行く處です、——そのわけはこの村では誰か死んだあとで、その晩は一人も、この村に残つてゐてはならない習慣になつて居るからでございます。私共はそれぞれの供物や祈禱をあげて、——それから死骸を残して出て行きます。そんな風にして死骸が残りますと、その家ではいつでも變な事が起ります。それで私共と一緒に御出で下さる方が、おためによからうかと考へます。外の村でよい宿を見つけてさし上げます。尤も、あなたは御出家ですから、或は化物や妖怪を恐れなさらないでせう。それで死骸と一緒に残る事が恐ろしくなければ、このつまらない家をお使ひ下さいます事は至極結構でございます。しかし申上げねばなりません、御出家でなければ、今夜ここに残らうと云ふものは誰もございません』

夢窓は答へた、——

『御親切な志しと有難いおもてなしには深く感謝致します。しかし参りました時に御父上様のなくなつた事を聞かせて下さらなかつたのが残念です、——と申しますのは少しは疲れてみました。が、出家としての私の義務をつとめるのが苦しい程には、たしかに疲れて居りませんでした。御話し下さつたら、御出かけ前に讀經を致すところでした。がしかし、御出かけのあとで、讀經を

致しませう。そして明朝まで遺骸の側にゐます。獨りでここに居ることがあぶないと色々御話してましたが、私にはその意味が分かりません。しかし私は幽霊やお化けは恐れませんが、それ故どうか私のために御心配はなさらないやうに』

若者はこの斷言を聞いて喜んだやうであつた。それで適當な言葉で感謝の意を表はした。それから家族の外の人々と隣りの部屋に集つた人々は、出家の親切な約束を聞いて、御禮に來た、——それからうちの主人が云つた、

『そこで、御出家様、あなたを御ひとりにして行くのが大層残念でございますが、私共は御別れしなければなりません。村のおきてによりまして、十二時すぎには一人もここにゐてはなりません。御願ですから、どうか私共が御側にゐない間、御からだに御注意なされて下さい。それから私共の留守の間に、何か變つた事を御聞きになつたり御覽になつたり、なさる事がございましたら、どうか明朝私共の戻りました節、その事を御聞かせ下さい』

それから出家を除いて一同は家を去つた。出家は死骸の置いてある部屋へ行つた。普通の供物は遺骸の前に置いてあつた。それから小さい燈明は燃えてゐた。出家は經を讀んで供養を済ました、——そのあとで瞑想に入つた。瞑想しながら静かな數時間ちつとしてゐた。無人になつて居る村には音一つしなかつた。ところが、夜の静けさの最も深くなつた時、音も立てずに腫げな大きなものが入つて來た。同時に夢窓は自分が動く力も、物云ふ力もなくなつて居る事に氣がつい

た。彼はそのものが抱き上げるやうに死骸をあげて、猫が鼠を喰べるよりも早く、それを喰べつくすのを見た、——頭から始めて、何もかも、髪の毛も、骨も、それから經かたびらさへも喰べるのを見た。それから、その怪しいものがこんなにして死骸を喰べつくしてから、供物の方へ向いて、それも又喰べた。それから來た時と同じく不可思議に出て行つた。

村の人々が翌朝歸つた時、彼等は庄屋の家の入口で、彼等を待つて居る僧を見た。一同は代る代る挨拶した。そして入つて部屋を見廻した時、遺骸や供物のなくなつて居るのを見て驚いたものは一人もなかつた。しかし、うちの主人は夢窓に云つた、——

『御出家様、あなたは多分夜の間にいやなものを御覽でしたらう。私共は皆あなたの事を心配してゐました。しかし今私共はあなたが生きて御無事でおいでになるのを見て大層嬉しく思ひます。できる事なら私共は喜んで御一緒にゐたかつたのです。しかし昨晚申し上げた通り村の掟で、死人があつたら私共は家を去つて、死骸だけを殘さねばならない事になつてゐます。これまでもこの掟を破りますと、何か大きな祟りがありました。掟に従ふと、死骸や供物が留守中になくなりません。多分あなたは、その成行きを見届けになりましたでせう』

そこで夢窓は臙げな恐ろしい形ものが、死人の部屋に入つて來て、死體や供物を喰べつくした事を話した。その話を聞いて驚くものは一人もないやうであつた。それから家の主人は云つた。『御出家様、御話はこの事について、昔からある話と一致して居ります』

夢窓はそれから尋ねた、——

『山の上のあのお坊さんが死んだ人のために時々葬式を致しませんか』

『どんなお坊さんですか』

『昨晚、この村へ私を案内したあのお坊さんです』夢窓は答へた。『向うの山の上のそのお坊さんの庵室を訪ねました。私に宿を拒んだが、こちらへ来る道を教へました』

聞いて居る人々は驚いたやうに互に顔を見た。それからしばらく黙つたあとで、家の主人は云つた、

『御出家様、山の上にはお坊さんもありません、庵室もございません』

この事について夢窓はもう何も云はなかつた。親切な人達は、彼が何かお化けにでもだまされて居ると思つた事が明らかであつたから。しかし、その人々に別れを告げて自分の行く路について必要な知識を悉く得たあとで、夢窓は山上の草庵をさがして、自分が實際だまされて居るかどうかを、たしかめようと決心した。彼は造作なく庵室を見出した。そして今度はその庵主は入るやうに誘つた。入ると、庵主は恭しく夢窓の前に頭を下げ、叫んだ、『あゝ恥ぢ入ります、——甚だ恥ぢ入ります、——實に恥ぢ入ります』

『私に宿をしてくれなかつたからといつて、別に恥ぢ入るには及びません』夢窓は云つた。『あなたに向うの村を教へてくれたので、そこで親切にもてなされました。それでその御蔭になつた御禮を申します』

『私は誰の宿もできません』庵主は答へた、——『私が恥ぢ入るのは、それを拒んだためではありません。只あなたに私の本當の姿になつた處を見られたから恥ぢ入るのです。——昨夜、あなたの目前で死骸や供物を喰ひつくしたのは私です。……御出家様、私は食人鬼でございます。私を憐んで下さい、そしてこんな有様になつた祕密の罪を懺悔して下さい。』

『昔し昔し、私はこの淋しい地方の僧でした。何里四方の間に外に僧はありませんでした。それでその頃は死んだ山の人の死體は、私が引導するためここに、——時には随分遠方から、——運ばれたものでした。しかし、私は商賣仕事のやうにのみ勤めをくりかへし、式を行つてゐました。——私はその聖い天職で得られる食物や着物の事ばかり考へました。それでこの利慾の邪念のため、死ぬと直ちに生れ變つて食人鬼となりました。それ以來この地方で死ぬ人々の死骸を喰べねばならぬ事になつてゐます。一人も残らず昨夜御覽になつたやうな風に喰ひつくさねばなりません。……今御願です、御出家様、私のために施餓鬼を行つて下さい。御頼み致します。あなたの御祈りでこの恐ろしい境遇から逃れられるやうに、私をお助け下さい』

この願を云ふや否や、庵主は消え失せた。それから庵室も又同時に消え失せた。夢窓國師は高草のうちに獨りで、或僧の墓であるらしい五輪の石と云ふ形の古い苔むした墓の側に跪まつて居る事に氣がついた。

(田部隆次譯)

Jitenmiki. (Kozuidan).